

---

# 「養う。」

ハットリミキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「養う。」

### 【Nコード】

N5975J

### 【作者名】

ハットリミキ

### 【あらすじ】

猫が時折持ってくる鼠や雀の死骸。

それが意味することは。

(前書き)

ちよつとしたバッドエンド。  
ちなみに作者は猫派です。

「昨日、うちのコがスズメを捕まえてきてさー」

百合が「うちのコ」と表現するのは、決まって彼女の飼っている猫のことだった。

「げー、マジ？ やっだー」

必要以上に顔をしかめた加奈子の反応に、百合は満足したように見えた。

「朝起きたら、ベッドの下にあるんだもん……死骸」

さすがに最後の単語は小声だった。私は手に持っていた食べかけの焼き鳥を皿に置いた。

「猫ってそういうコトするって聞くけど、本当なんだね」

「そうよ。今回が初めてじゃないもん。虫とか、超困る」

「なんでそんなコトするんだろ？」

百合と加奈子は黙って少しの間考えていたようだったけれど、同時に私に答えを求めるように視線を向けた。向けられたところで、私にわかるはずもない。

「ほめてもらいたいのかな？」

「かもねー」

私は二人が話しているのを、ずっと冷めた気分で黙って聞いていた。

「あんたのこのコはどう？」

百合が突然、私に話をふってきた。

「えっ……、あ、うち？」

何のことかと思った。私の住まいはアパートで、ペット厳禁なのだ。

「ほら、近所の猫が来るって言ってたじゃん」

「あー……」

思い出した。それは、アパートの並びに一軒家を構える大家の飼い猫のことだった。近所で何度か遭遇するうちに、ついて来るようになったのだ。

「どうだろう？ よその猫だし……」

私は、猫は好きでも嫌いでもない。ただこれまで触れ合ったことはなく、どちらかと言えば犬派だ。

その猫をアパートの部屋に最初に入れたのは、私ではなく彼の方だった。

「ちよつと、勝手に猫入れないでよ」

「えー？ いいじゃん。大家んとこの猫だろ？」

同棲して一年になる彼は、勝手に食器（よりによって、私のお気に入り）に鰹節を入れて猫に与えていた。

「カワイイじゃん」

彼は猫の頭を撫でていて、猫はそれに応えるように喉をゴロゴロ鳴らしていた。

（確かにカワイイ……）

大家は「うちのミーちゃんが時々お邪魔してるみたいで、ごめんなさいね。」と言いながら、特にそれを阻止するようなことはなく、猫は当たり前のように私の部屋に日参するようになった。その度に彼は、頼まれてもいないのに餌をやっていた。

やがて猫は彼が残業の時にも顔を出すようになり、そうになると餌をやるのは私の仕事になった。まだ慣れずにおっかなびっくり触れているのに、猫は彼よりも私の方になつくようになってしまった。

「お前ばっか、ずるい」

そう言われても……。猫は子供のように拗ねる彼を無視して、愛らしく私に向かって「ミャオ」と鳴くだけだった。

（そう言えば……）

彼が言ったことを思い出した。

「小さい頃猫飼ってたんだけど、よくネズミ獲ってきてさ、その度

にお袋が大騒ぎしてたよ。」

「ネズミ?!」

「珍しくないよ。しょっちゅうだった」

その時、確か私も加奈子と同じ問いを口にした。

「猫ってどうしてそんなことするの?」

「ほめて欲しいんだって聞くけど……」

彼もそう言っていた。だけど、

「猫養い説”ってのもあるよ」

そう言い出した。

「何それ?」

「猫は家族の中で、自分が一番エライとか思ってたって。だから獲物を持ってきて、自分が養ってる家族に餌を与えてるつもりなんだとさ」

「えー?」

「まあ喰えや”ってことじゃね?」

そう言っただけは笑っていた。

「どうしたの?」

私は加奈子の声で我に返った。

「へっ!?!」

「どうしたの? ぼーっとして」

加奈子も百合も、不審そうな顔で私を見ていた。

「あ、ご、ごめん」

「そっだ、あんたのところはどうなの?」

百合は何か思い出したようで、私に問い掛けた。

「何が?」

「ほら、カレシ」

私の気持ちの中に暗雲が立ちこめた。

「カレシが……何?」

「一緒に暮らして、もう一年になるんじゃないっけ? 結婚と

かしないの？」

二人ともワクワクしながら私の顔を見ていた。私は困ってしまった。楽しい報告など何も無いのだ。

「んー、まだ、かな？」

私の曖昧な返事に二人はがっかりした様子で、すぐに「そうなんだ。そういえばさー……」と他の話題に移っていった。

コンビニでビールを数本買った。

加奈子たちとの飲み会では、全然酔えなかった。

相談したかったことがあったのに、全然できなかった。私はヤケになっていて、飲み直すつもりだった。

コンビニを出ると、うちのアパートが見える。

私の部屋は真っ暗だった。

(まだ帰ってないんだ……)

帰っているはずはない。けれど、私は期待をしていた。期待をしていた自分が哀れで、振り切るように首を横に振った。

自宅に着いて鍵を開け、中に入った。やはり誰も居なかった。今朝、仕事に出る前の様子と変わりはなかった。ケータイにもメールは無かったし、家の電話にも留守録は入っていなかった。

私は買ってきたビールを居間のテーブルの上に乱暴に置いた。

彼が帰ってこなくなつて、もう一週間経っていた。

「残業が続いてさ、会社の近くのホテルに泊まってた。」同じ会社でも勤務する支店が違うから、彼が言うことを信じていた。彼と同じ支店に勤める同期のコが、

「あんたの彼、新人のコとできてるみたい……」

と、教えてくれるまでは。

激昂した私はすぐに彼に問い詰め、すぐケンカになってしまった。すると彼は

「お前とはもうやっていけねーよ!」

と言い放ち、出て行ってしまったのだ。

まだ彼の私物は残ってはいたけれど、元々一人暮らしの私の部屋に彼が転がり込んできたようなものだったから、捨ててもいいものなのかもしれない。けれど、それではもう彼は帰ってこない……。

「バカヤロウ」

誰もいない空間に向かって、毒を吐いた。

「あんなヤツ、こつちから願い下げだわ」

クイーッと一本を早々に空けた。忘れなきや。忘れなきや……。

(もう少し明るい気分にならなきゃ……)

その時、窓の外に小さなものの影が見えた。

(！)

いつものことなのに、少し驚いてしまった。その影は、「ニヤーン」と小さく鳴いていた。大家の猫だった。

「ほら、いらっしやい」

いつもの癖で窓を開けると、ミーはぬるりと部屋に入ってきた。そして何かをねだるように私に向かって「ニヤアン」と鳴いた。

「わかったわかった。何か持ってくるから待ってて」

自分のつまみも欲しいと思い、キッチンへ向かった。冷蔵庫を開けると、最初に目についたのはウインナー一袋とおつまみ用のチーズだった。彼の好物だった。

(これでいっか)

そのチーズを持って、大人しく待っている猫のもとに戻った。チーズをちぎって小皿に置くと、猫はうれしそうに食べ始めた。

(彼もこんな風に、チーズあげてたっけ……)

どすると、気持ちが重くなった。

(どうしてこんなことになっちゃったんだろう?)

そのまま落ちそうになった気持ちを何とか盛り上げようと、私は新しいビールを開け、一気に半分くらい飲んだ。ミーはそんな私を不思議そうに見ていた。

「ごめんねー。あの人、いないのよ」



私がそう言ってミーの頭を撫でると、ミーは目を細めて「ミヤウン」と鳴いた。

「なんでだろうね？」

もうダメになりそうだった。これまで必死に堪えてきたのに、ぶわつと涙が出てきた。

「なんであの人、帰って来ないんだろう？」

涙を止めようとも思っただけで、何もかもが面倒になってしまった。ボロボロ泣きながら語りかける私に、ミーは少し驚いた様子だった。そんなこともお構いなしに、私は悲劇のヒロインよろしく泣き続けた。

「ミヤウン」

床についていた手の甲に、猫のザラザラした舌が触れた。ミーを見ると、心配しているような表情（に見えた）で、私の顔を見上げていた。

「あんだ、やさしいのね……」

私はミーを何度か撫でて、そのあたたかさを楽しんだ。

何となくわかっていた。どんなに泣いたって、どんなに懇願しても、彼はもう帰って来ないのだと。

気持ち悪くなるまで飲もうと思った。私は新しいビール缶に手を伸ばした。

その晩、私はいつの間にか眠ってしまったらしかった。

窓が少し開いていて、そこから入ってきた風の冷たさに驚いて起きた。

「やだ、なんで開けっぱ……？」

ミーが居ないことに気が付いた。おそらくは、鍵のかかっている窓をミーが勝手に開けて出て行ったのだろう。ミーは窓を開けることができて、閉めることはできない。

いくらホットカーペットを点けていたとはいえ、十二月に入ろう

とするこの時期にこれは寒すぎた。私は何度かくしゃみをして、鍵をかけなかったことを後悔した。

飲み過ぎでもあったらしく、頭がガンガンしていた。すでに明け方で、窓からは陽が差し込んできていた。

「ニヤウ」

ミーの声が出た。

私は窓を見たけれど、ミーの影は無かった。そもそも方向が違った。玄関先から聞こえてきていたようだった。

玄関から「入れてくれ」と鳴くのは、これまでもあった。無視しようかと思っただけで、あまりにもしつこく鳴くので、私は痛む頭を抑えながら玄関に向かった。

「何なのよ、こんな朝早く……」

ドアを開けた。

妙に重かった。力を入れると何かが崩れ落ちる感触がして、やっとドアが開いた。

「なっ……」

私は酔っぱらって、深く眠っていた。だから、気が付かなかった。彼がケータイに電話を寄越していたことに。

「鍵をなくしたから、開けておいてー」

「起きてよ、ね。寒いよ」

「寒いから早く開けて。俺が悪かったよ。眠いよ……」

何本もの留守録が入っていたことに。

そして、彼も相当酔っぱらっていたことに……。

そこには凍えた彼の骸が横たわっていた。ただ眠っているかのようにも見えた、けれど。

私は息を呑んだ。

そこへ、

「ミャウ」

と、ミーが鳴いた。

それはまるで、

「捕ってきたから食べなさい」  
と言っているかのようだった。

了

(後書き)

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。  
2 / 10、少々変更しました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5975j/>

---

「養う。」

2010年10月8日14時44分発行